日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第146号　2023年3月

〈座談会〉

漫画『島耕作』から読み解く反中感情の文化的表象の形成とその影に沈む日本社会

新　川　綾　子
川　村　潤　子
齋　藤　一　晴
原　田　忠　直

原田：今日は，弘兼憲史の漫画・島耕作シリーズを取り上げ，近年，多くの日本人が抱く反中感情との関りについて話し合ってみたいと思います．まずは，反中感情の実態を内閣府が発表している数値からみると，「中国に対して親しみを感じるか？」という質問に対して，2021年では，「親しみを感じる」と回答した割合は20.6%，「親しみを感じない」は79.0%です．おおよそ8割の日本人が，中国をよく思っていないといえるでしょう．ただし，このような感情の高まりが顕在化するのは，2004年以降の傾向です．調査が始まった1978年では，むしろその割合は逆でした．少なくとも1980年代を通して，「親しみを感じない」とする層は3割弱で推移しています．さらに，1989年から2003年までの間は，両者の割合は均衡した状態が続きます．あくまで個人的な見解ですけど，反中感情を読み解く上で，この均衡していた時期が重要ではないかと理解しています．確かに，餃子中毒事件（2008年），尖閣諸島問題（2012年）などが，反中感情を直接高めた要因であることに間違いないですけど，そのような諸事件に着眼していただけでは深層に迫ることはできないと思います．

川村：私が初めて中国に行ったのは，尖閣諸島問題が表面化する2012年ですから，反中感情が一気に高まり始めた時期でした．「なんであんな国に行くの？」って友達からいわれました．その後，コロナになるまで，毎年中国に行って，体験談を友達に話しても，「中国の話はいいよ」と拒絶されました．深い溝のようなものを感じているのですが，その溝は，親中，反中が均衡していた時代に準備されていたということでしょうか．

原田：1980年代後半頃から，旅行，ビジネス，留学，その目的はさまざまですけど，ものすごい数の日本人が中国に行き，その実際に触れることになります．そして，彼らは，帰国後，体験談を周りの人びとに話します．いわゆるクチコミですね．もちろん，クチコミですから，どこま

でも感覚的なものですが，その内容は賛美から非難まですべてを含みます．でも，不確かな情報であっても，家族や親戚，親しい友人など身近な人の話は，信用度の高い情報として認識されていくことになります．身近な人が，中国は素晴らしいといえば，それを信じることになるでしょうし，逆に，悪口をいえば，それを信じたのでしょう．だから，均衡状態から，どちらに転んでもおかしくはなかったともいえます．しかし，やはり人間は，悪口に共感しやすいのではないかと思います．「中国では，電車やバスに乗る時，誰も並ばない」とか，「彼らの生活水準は遅れている」という話の方が受け入れ易かった．しかも，悪口の方が，優越感を感じることができたのでしょう．

齋藤：近代化の優等生という自負ですね．自分たちの方が，優れている点の再確認．その感覚は明治時代からのものだと思います．中国は「遅れていて，分からず屋」という感覚です．

原田：そうです．当時のクチコミは，結局，日本社会に潜む奢りのようなものと共鳴し合うことになったといえます．それ以外の選択肢がなかったのかもしれません．その意味でいえば，別の選択肢を用意できなかった中国研究者の責任はすごく大きいと思います．

川村：中国社会学者の園田茂人は，『中国人の心理と行動』，『証言 日中合弁』などで，日系企業の駐在員やその経験者，つまりビジネスマンに対してヒアリングやアンケート調査を行って，中国社会の実像を描こうと試みていますが，正直にいって，ビジネスマンが，中国人に振り回されている姿が印象に残りますし，中国に対する嫌悪感が増していくのではないかと思います．

原田：ヒアリングとか，アンケート調査という科学的な手法が取られているから，社会科学ということになるのかもしれないけど，内容は，クチコミの羅列です．もちろん，クチコミは大事だけど，その背後について語られているわけではないから，クチコミをまとめて中国像といわれても，受け入れることはできない．しかし，園田の著作に登場するビジネスマンは，とりわけ園田に語った以上に，身近な人びとに同様な話をしているだろうから，日本社会に中国の悪口が浸透していくうえで，ビジネスマンが果たした役割は小さくなかったでしょうし，それを証明する点では重要な資料だと思います．

川村：発信源としてのビジネスマン，もちろん，ビジネスマンだけではないでしょうけど，クチコミで中国の悪口が広がっていって，それが，反中感情の形成のバックグランドになったのではないかという流れは分かります．ただ，そうした悪口が，どこかで結びつけられていく過程が必要ではないかと思います．

原田：餃子中毒事件とか，尖閣諸島問題というのは，日本社会に散らばっていたクチコミが一つ

にまとまる契機になったと理解することはできますが，表面化する前に，多くの日本人のなかですでに結びつけられていたと考えています．その一つが，今回のテーマである島耕作シリーズです．とくに，島耕作が働く初芝（モデルはパナソニック）の中国進出の模様を描いた『取締役島耕作』（2002 ～ 2005 年，『モーニング』にて掲載）と『常務島耕作』（2005 ～ 2006 年，『モーニング』にて掲載）を取り上げ，話しを進めていきましょう．まさに，これらの作品は，反中感情が急速に悪化していく前夜とでもいうべき時期に発表されています．つまり，クチコミで仕入れていた情報は，島耕作を読むことによって，一般化していったのではないかという考え方です．もちろん，これは，一つの仮説です．ただ，島耕作シリーズは，サラリーマンのバイブルともいわれていますから，クチコミを結びつけ，一つの塊に仕上げる影響力はあったのではないかと理解していますし，一つの文化的表象として，検証する価値はあると思います．

川村：ただ，『取締役島耕作』と『常務島耕作』を読めば分かりますが，島耕作は，必ずしも中国を露骨に嫌うこともないし，悪口もいっているわけでもないですよね．しかも，近代化の優等生の自負というか，中国人に対して高飛車な態度で接しているわけではないです．

原田：そう．島耕作は，嫌な日本人として描かれてはいません．しかも，作者の弘兼は，何度も中国を訪問して，調査しているだけあって，すごく丁寧に当時の中国を描いています．もちろん，漫画だから，ドラマチックな面もあるけど，反中感情を煽るように描かれてはいません．だから，仮説を論証することは単純な話しではありません．しかし，今回の座談会は，新川先生と川村先生に加わってもらって，つまり，女性の視点から，島耕作を再評価するなかで，答えを見つけ出せないかと考えています．まあ，すごい他力本願なんだけど，私と齋藤先生だけで語ったら，島耕作って，中国人に対して偏見もなく，いい奴じゃない？で終わってしまいますからね．

齋藤：そうですね．女性陣からみて，島耕作は，どのように映りますか？

川村：なんであんなにもてるのか，理解できません．

新川：島耕作は，こんなに沢山の女性たちから好かれたら怖くないのだろうかと思いました．出会う女性の多くが島耕作を好きになる世界で，読者の視点からすると，都合が良いなと思わなくもないです．さらに，女性だけではなく，男性からも強く意識され，嫉妬される存在でもあると思います．物語冒頭で自殺する人物も，島耕作に対して，強い嫉妬心を覚えています．島耕作が好意をもたれる過程やきっかけがあまり丁寧に描かれていないので，なんでこんなに気を持たれるのか不思議だなあと思いました．

川村：でも島耕作みたいになりたいという人は，少なからず男性の中にはいるのかもしれないで

すね．会社のなかで，あの人のようになりたいとかいうような，あこがれている人がいるような．女性は，憧れの人っているのかな？働き方の姿っていうより，プライベートの充実の方をみるっていうか．生き方をみるというか？

新川：たしかに．私は，仕事面でも生活面でも島耕作を憧れの対象としては思えないかもしれません．

原田：厳しい意見だけど，島耕作のようになりたい男性は少なくないと思うけど・・・．

齋藤：そう思わないと読まないですよね．

川村：なんでそう思うかが，理解できませんね．でも，私よりも新川先生の方が，島耕作に対しては，ご意見がたくさんありそうですから，新川先生，もっと深掘りしてください．

新川：私は初めて島耕作を読みました．これまで島耕作に触れてこなかったので，凄く面白く感じました．一番印象深かったのは，全体を通して描かれている，大企業の中で働く男性の価値観かなと思います．団塊世代の大企業の会社員ってこういう感じなのかな，それを写し取った漫画なのかなと思い，印象に残る箇所が沢山ありました．

齋藤：こういう感じって？

新川：なかでも驚いたのが，1巻で自殺する人物が出てくるところです．島耕作の同期でリストラされた人物が，島耕作の前で刀で自殺していくというシーンですね．

原田：ありましたね．

新川：島耕作は，そのシーンに前後するかたちで，中高年失業対策有識者懇談会に出ています．その会で「男性は誰にも話さないで自分一人で解決しようとします」という話が出てきます．企業社会のなかで働く男性の大変さが全体を通して描かれてたなと思います．

原田：自殺はかなり衝撃的に描かれていますね．もちろん，男性の自殺者は多いけど，自殺しなくても，リストラ，出向も含めて，新川先生からみれば，実に異常な社会としか理解できないということですか？

新川：異常といい切ることは難しいのですが，自分にとって想像しづらい社会だなと思います．島耕作が，自殺した同僚のことで落ち込むんですけど，落ち込んだときに，自分の働き方とか，

自分の人生とか，企業のあり方を内省するのではなく，上海のビジネスが不安になってきたなという考えに繋がっていくのが不思議でした．自分自身に対して矢印が向かうのではなく，今後のビジネスへの不安というふうに着地していくんですよね．島耕作自体は，同僚の自殺をきっかけにして，自分自身の働き方・生き方に関しては特に疑問を抱いていない，という描かれ方なのが衝撃的でした．

原田：衝撃的なんですね．

新川：はい．その後，島耕作を含めた初芝での会合で「日本では 80 年代くらいから労働の意味はきれいごとになった」という言葉が出てきます．

原田：やりがい，生きがいとか，そういう言葉だね．

新川：そうですね．その後，初芝の社長が長時間労働を再評価し，「日本人はもう一度昭和 30 年代に戻ってやり直すべきかもしれんな」という発言がありました．この漫画では，働き方をこのように捉え直していくんだっていう，発見がありました．

川村：私もそこが気になって，メモしました．

原田：昭和 30 年代の働き方って何を指しているのでしょうね．昭和 30 年代って，まだ高度成長の前だよね．

新川：高度成長期が始まった頃でしょうか．ただ，昭和 30 年代の働き方・生き方は，島耕作自身も知らないはずなので，理想を抱いているのかなと思います．

原田：確かに知らないでしょうね．

新川：島耕作は初芝が儲かると，日本が発展し，人びとも豊かになるという，大企業中心の考え方をしていて，今から約 20 年前の漫画ということを差し引いても，島耕作の働き方に関する価値観には驚きました．作者の弘兼は，島耕作の価値観を批判するのではなく，企業人のよくある一つの考え方として描いているのだろうなと思う一方で，私は弘兼の立場性をいまいち掴みきれなかったなとも思います．

原田：なるほど，その視点は面白いね．この視点をもっと追求しましょう．ただ，昭和 30 年代と現在を比較して，日本企業の働き方は，それほど変わってないのではと思いますけどね．

新川：そうですね．働き方改革はあったけれども，日本企業の過労死や過重労働や労働災害といった，過酷な実態があると思うので，その状態で国際的な企業として通用することが可能なのだろうかと思います．

原田：島耕作は，スマートな面もあるけど，一方で，古い体質というか，古い価値観を引きずっていますね．島耕作個人は，出世して成功しているようにみえるけど，中国における企業の業績は思うようにいかない．もっとはっきりいえば，現実社会では，多くの日本企業は，失敗するけど，その失敗と古い価値観は結びついているということですか？

新川：そうですね．働き方の話で，もう一個驚いたのは，島耕作はとにかく仕事の話しかないということです．仕事以外の生活の話が一切出てこない．交友関係も一部の同僚と上司で，その同僚と上司はほぼ男性です．家族は，娘だけ出てきましたが，友人は登場せず，趣味もなく，会社以外の横のつながりが描かれません．なので，島耕作が会社を離れた時に，どのようにして生きてくのだろうっていう点が気になりました．

原田：会社人間ということですね．確かに，島耕作は，社長にもなる，会長にもなっていくんだけれど，それはごく一部の人間が得ることができる成功事例ですからね．むしろ多くの人間は途中で会社から弾き飛ばされてしまうし，家庭に戻っても厄介者にされるケースは少なくないでしょう．

新川：そうですね．

原田：会社のために働いて，趣味のない人は少なくない．その点は，島耕作が連載される前から現在に至るまであまり変わっていないと思います．

川村：以前，「NPO 法人マザーズライフサポーターの痛快な歩みが意味するもの―母たちは，停滞する既存の社会制度を尻目に，自分たちの望む社会を作り始めた―」という論文で，「男の孤独」というのを指摘したことがあります．女性は結婚とか就職すると，社会と繋がらなくなるといいますけど，男性は社会と繋がってるといわれても，会社と家の往復だけで，それを社会といえるのかっていうのを書いたんです．おそらく，男性もあんまり外との繋がりがない．この漫画を読んでいても，本当に家と会社の中だな，いや家はあまり書かれてないですけど，会社の中の話って感じでしたね． 休日も描かれていないような感じでしたね．

齋藤：それこそゴルフぐらいだね．

川村：ゴルフですね．

原田：ゴルフも仕事の一つだよ．漫画のなかでは，上海でゴルフ場を作る話が出てくるけど，上海人が趣味でやるゴルフもあるんだろうけど，どちらかというと，会社の人たちが接待のために使うという感じですね．

川村：ゴルフと風俗，飲み会くらいですかね．会社以外で描かれているのは．

齋藤：そうだね．

原田：ゴルフも風俗関係も仕事繋がりですからね．仕事から離れることができない男性は少なくないでしょう．すべてを仕事に捧げているという感じです．つまり，生きがいとか，やりがいっていうのは，別に自分のためだけじゃないんですよ．会社のためといってもいい過ぎではないでしょう．たとえば，さきほど，話題になっていた昭和30年代の働き方っていうのは，もしかすると，戦争に負けて，何とか復興しなきゃいけないという思いが強かったんでしょうね．とくに復員してきた人たちが中心となって，戦争では負けたけど，自分の会社は負けないというモチベーションが形成されたんでしょう．どこかでその精神は受け継がれていると思います．つまり，昭和30年代の働き方というのは，世界で一番の会社にしたいという意気込みみたいなものが大事なんだと，いいたかったのかもしれないね．

新川：なるほど．

原田：ただ，その目的がどうであれ，生きがいとかやりがいというのは，会社のためであることに間違いないと思います．

齋藤：自分が支えてるんだっていう．

川村：でも今よりかはまだ，会社は大事にしてくれてた感じはある気がします．

新川：うんうん．

川村：社員旅行だったり，運動会だったりとか，同僚，上司が家族のことも知っていたりとか．

齋藤：確かに．私の親父はそういう時代でしたね．父親は国鉄でしたけど．島耕作の世界と同じで民営化されて，85年の中曽根改革，それでJR東日本になって，カレー屋さんとか，駅ホーム

の，あるじゃないですか，きしめん屋とか，車掌とかやっていた人がやるようになったり，JR の駅ビルの警備員．少なくない人たちが会社のために役立っているって最後まで勤めてるの．

新川：へー．

原田：会社のためにすべてを捧げるという感じですね．

齋藤：自分もなんだかんだいって会社のために役立ってる，必要とされているという，自己肯定感を実感するために．

川村：俺たち頑張ってるよねって？

齋藤：そうそう，24 時間戦えますかみたいな．

新川：モーレツ社員ですね．

原田：そうだよね．女性関係の話を抜けば，漫画の大半は，モーレツ社員の話だけですね．

川村：家庭での姿が描かれなかったというのは，家庭では認めてくれる人があまりいなかったからです？

原田：まあ，島耕作は離婚しているけど，すべからず会社人間という点にその原因は，集約できると思います．

新川：読んでいて，そこがすごく苦しかったですね．最初の方で，今野さんというキャラクターが退職するんですけれども，その時に，初芝のビルに万歳三唱するんですよ．

原田：ありましたね．

新川：あの万歳三唱のシーンを見て，企業社会の歪さが出ているなと思いました．あのシーンは読み方が難しいのですが，一見それが美しいシーンのようにも描かれていて，違和感を抱いたところです．

原田：サラリーマンは，やっぱり，最後はああなりたいと願うのかな？

齋藤：身を粉にして.

原田：みんなに花束を贈られて.

齋藤：思ったと思いますけどね.

原田：私はどちらかというと，みじめだなあと思ったんだけど.

新川：みじめというか・・・私は辛かったですね．自分だったら，会社に万歳三唱するほど人生を捧げたあと，何が残るんだろうとか，このあとどうやって生きていこうと悩んでしまうと思います．会社から放り投げられた気がするのではないか，とか.

原田：退職したら，何もないですよ．だから，島耕作も，鹿児島かどこかの営業所の再建で，退職職員たちを再雇用する対策を打ち出しますね.

齋藤：街の電気屋さんみたいな，メンテナンスみたいな.

新川：島耕作っていろんなアイデアは出てくるんですけれども，そのアイデアが結局どうなったのかっていうのが描かれないですよね．でも，アイデアはとにかく沢山出てきますね.

原田：アイデアまでは出せるけど，その後を描くことはできないというのが真実ではないからかな．退職後の問題に限らず，たぶん，その先を描くと，つまり，島耕作が社会問題を解決していくように描くと，急に理想的な世界が展開されて，現実から離反していくことになってしまう．漫画の世界だから描けるように思えるけど，それをやると島耕作像が大きく変わってしまう．やっぱり，島耕作は，憧れの存在であり続けないといけなかったと思います．もちろん，それは別の意味での理想的な世界が広がるんだけど．たとえば，ゴルフやったり，高級クラブで飲んだりとかね.

齋藤：ゴルフ行きたいなって．いまではゴルフの会員券なんか安いっていうか，あれだけど，昔はゴルフの会員券を買ったなんかいったら大変なことだった.

川村：そうなんです？

齋藤：ステイタスでしたね.

新川：私は川村さんよりも年齢が上で，大学生の就職活動期にリーマンショックや年越し派遣村が大きな話題となった世代です．この島耕作は 2002 年前後に出版された漫画だと思うのですが，島耕作が大企業の会社員として悩みながらも生き生きと過ごしていくというストーリーを，実感を以て受け止めることができないなと思いました．思えば，2003 年の労働者派遣法の改正や，製造業への派遣の解禁を経る前に出版された漫画なので，まだ日本社会が労働分野の規制緩和で大きく変化するまえの姿を描いているのかなと思います．

齋藤：ほんとに．小泉内閣っていつだったっけ？

新川：2001 年から 2006 年までですね．

齋藤：小泉さんがぶっ壊す前の．

新川：そう，ぶっ壊す前の．

原田：小泉政権が行ったことは，社会の底を割ったことだと思います．労働者階級のその底辺部分を割ったことによって，上の人達はそれによって守られている．島耕作たちもそれで守られていますね．

新川：そうですね．確かに．島耕作の漫画では，企業のエグゼクティブしか出て来ず，特に非正規労働者の話は登場しません．エグゼクティブ以外が登場したとしても一部の正社員くらいです．企業を舞台にした漫画である一方で，島耕作の世界観が限定されていることの表れだなと思います．

原田：確かに中国でのストーリーでも，実際の労働現場が，ほとんど描かれていないです．

新川：臨時工の話がでてくるだけで．

川村：実際は，臨時工，農民工たちが，モノを作っているのに，そういう現場が描かれていないから，リアル感が足りない感じがします．

新川：そうですね．それがこの島耕作の限界というか．

齋藤：取材はそこまでできなかったんだろうね．

原田：確かに．そこまで取材していたら，ものすごい時間かかりますからね．それに，島耕作の活動範囲を意図的に限定したんでしょうね．退職者の話，労働者の問題などのリアルな問題は，ちょっと現実離れしたゴルフとか，高級クラブとか，女性たちの話で蓋をしたということでしょう．派遣村の話よりも，島耕作が交際する女性たちに目を向かわせ，物語を展開したという感じですね．でも，そういう傾向は，漫画の世界だけではなく，現実社会でもまったく同じように展開されていますから，読者からみれば，より親和性を持てることになったと思います．まあ，リアルな社会問題を意図的に排除することは作者の設定でもあると思いますが，もう一度，島耕作の人物像に話を戻すと，たとえば，島耕作の女性観のようなものは，どういう設定をしたのか気になります．

川村：島耕作の女性観の設定は分からないですが，ただ，中国では，女性に対して，嫌な扱いをしないというか．嫌な扱いを受けたことはないですね．たとえば，飲み会とかにいってもお酌してとか，女性だから名刺渡してくれないとか，そういう感じのことはしないし，女性を一人の人として扱ってるなっていうのは常に感じます．そう，多くの男性は女性を一人の人として接してくるので，本当，嫌な思いをほとんどしたことがないんですよ．中国の飲み会は基本居心地が良いです．嫌な思いをしないんですよ．かといって，女性だからっておだてられるわけじゃなくって．本当に一人の人として扱われてるなって感じますね．このような女性への接し方は島耕作にも見えるかなっていうのは思いました．全体的には．

原田：そういう意味でいうと，島耕作は，女性だから，末席に座れとか，晩酌するのは当たり前という感じではないですね．日本社会でよく見かける風景と比べれば，島耕作はまあまあなのかなって思ったりしますけど，新川先生は，女性との接し方はどう思いますか？

新川：漫画のなかで島耕作が関わる女性は，割と二極化しているなと思います．一方では外務大臣や秘書といった企業や政府でばりばりと働く女性，一方ではクラブやスナックで働く女性かなと思います．島耕作は，仕事関係の人とは恋愛関係にならず，クラブの女性と恋愛し，なおかつ彼女たちは島耕作のことが大好きですよね．島耕作の女性への接し方は割とソフトな一方で，島耕作の周りの男性が酷い扱い方をしているので，島耕作の評価が相対的に上がるという感じでしょうか．ただ，島耕作のソフトさはいいところなのかもしれませんが，女性たちがなぜここまで島耕作を愛しているのかがわからなかったし，充分に描かれていないなと思います．

川村：話の内容も仕事の話しかしないですよね．

新川：確かに．島耕作は頻繁に女性の機転で危機を切り抜けるから，女性からなんでそんなに好かれているんだろうなーって不思議に思いました．

原田：要するに，島耕作を本当に愛することができないということですね．少なくとも 2 人は島耕作に恋心を抱かないでしょう？

新川・川村：そうですね．

原田・齋藤：笑

新川：島耕作の周囲にいる男性の発言のなかで，私がひどいなと感じたのが，中国人の女性の容姿を一方的に上からジャッジすることですね．例えば「この店の娘はみんな小柄でずんぐりむっくりしているでしょう．スラッと背の高い上海の娘とは違います」とか，「ちょっと年増だけど顔立ちがいい」とか．島耕作はこれをやらないから，相対的に評価が上がるようになっていますが，島耕作に魅力があるのかというと，ないと思います．

原田：厳しいね．

新川：そうです．

齋藤：島耕作は良く見えるだけで．

新川：余計なことをいわないだけで．

川村：笑

原田：作者が聞いたらびっくりするよ．確かに，島耕作は，下品ではないけど，多くの日本人，とくに男性が海外に行った場合，ヨーロッパではあんな横柄な態度とらないですよ．たとえ人種差別されても，立ち向かっていくような日本人はみたことない．でも，アジアでは，何であんな横柄な態度でいられるのか，理解できない．

新川：私がたまたま読んでいた，名古屋医科大学医学部出身で新郷同仁会診療防疫班の医師が書いた「王姉妹」という記事があります（『名帝大医学部学友会報』第 57 号，1940 年 6 月 30 日発行）．この記事のなかで医師が中国人の「看護婦」と交流して感じたこと・考えたことについて書いているのですが，割と「看護婦」の容姿について言及しています．詳しく内容を読むと「日本人に比して，総じてほつそりした頸すぢ，なでた狭い肩，すらりと伸びた脊丈，特に目立って羨ましく思うのは，腰から足にかけて真直に発育した長い，なだらかな下肢の線である」と書かれています．医師が「看護婦」の容姿を上から下までじーっと見ていて，その描写を記事に書い

て，なおかつそれは名古屋帝国大学医学部構成員が読む紙面に掲載されています．単純な比較はできませんし，時代や地域は違うけれども，島耕作で登場する中国人女性への眼差しと少なからず似ているなぁと思いました．

原田：それはすごい重要な指摘だと思う．何なんでしょうね．

新川：日本人が中国人に向けている特有の眼差しがあることに加えて，ジェンダー規範も大きく変わってるんだろうって思いました．

原田：日本には，ジェンダー的な問題に対してわけのわかんない理屈を並べて，横柄な態度を続けている男性が多すぎます．ああいう男性は，アジアにいくと，もっと露骨になります．横柄さとは，日本人サラリーマンの代名詞でもあるでしょう．日本で抑えられているものが，勢いよく吹き出すようで．

新川：島耕作は一応露骨なことはしないですね．

原田：もちろん，島耕作が，露骨だと引いちゃいますけど．でも，彼が，露骨なサラリーマンとまったく違う人間かというと，必ずしもそうじゃないかも．横柄な態度を表に出さないだけかもしれない．

新川：そうですね．そう思いますね．島耕作の娘の夫は黒人で，彼女が初めて島耕作の前に夫を連れてきたときの島耕作の最初の反応を見ても，とても驚き，恐れているような描写になっています．最終的に島耕作とその夫はわかり合うことにはなりますが，この描写からも，島耕作は，ステレオタイプ的な社会通念のようなものを素直に内面化している存在だなぁと思います．

原田：内面化ですね．その辺はある意味，作者の狙いかもしれないけどね．

新川：あ，そう．そうですね．

原田：ある程度，社会通念が内面化していないと共感できないからね．でも逆にいうと，作者がどう思っているかは別だけど，全然かけ離れた存在だと共感できないでしょう．ただ，島耕作は，みんなと同じような感覚とか，価値観を内面化しているけど，ただ，ちょっとだけ先を歩いている，手の届きそうな場所に存在しているという感じでしょうか．

齋藤：AKB 商法だ．

原田：スーパーマン的な発想ではなくてね．社会問題を次から次に解決するわけではないし，すごい権力もっているわけでもないし，逆にいえば，それが流行った理由なんだろうな．

齋藤：そうですね．

川村：でも，手が届きそうで届かないんですね．

原田：ただ，内面化されている部分は共有していると確認することができる．なんというか，根っこのところで繋がっていると感じることができるんだろう．

川村：島耕作のどの辺と繋がっていると？出世を順調にするとか，こんな大変な会社のなかで頑張っていること？人物像？それとも，だれも現実社会では認めてくれないところを，認めてくれる気がするということ？島耕作なら認めてくれる，ということでしょうか．

齋藤：なるほど．

原田：島耕作が認めてくれるならば，頑張らなきゃいけないんだってね．コツコツやっていると，認められるとかね．男性は男性社会のなかで認め合っているところがあるんだろうね．あいつはすごいとか．出世するっていうことで．女性からしたら出世なんてばかみたいでしょ？

川村：ばかみたいとは思いませんけど．

原田：出世でなにが大事なんでしょうかね．賃金が高くなると嬉しいけどね．

川村：肩書もほしいんじゃないですか？

原田：肩書はある意味権力だからね．

新川：でもこれのストーリーを楽しめるのは島耕作と同じ年代の人だけじゃないですか？

齋藤：そうだと思う．

新川：島耕作より若い人が読んだら，こういう上司がいたらちょっと辛いかもと思ってしまう気がします．

原田：そうなの？

川村：でもいま同世代くらいの人たちが携帯漫画とかで読んでるんですよ．

新川：え？

川村：私が中国の話とかすると，中国といえば島耕作読んでるよっていわれることちょくちょくあって．

新川：そうなんですか？えー．

原田：島耕作って，どこかの調査で，上司にしたい漫画キャラランキングで上位に入ってますよね．

新川：たしかに見たことありますねえ．上司にしたい１位のキャラみたいな．

原田：そう．若者を含めて，そう思っている男性は多いだろうね．でも，新川先生はそう思わない．上司だったら嫌だっていうのは，なんで？

新川：倫理観ですかね？

齋藤：倫理観？どんな？

新川：何ていうんだろう．働き方に関しても，モーレツ社員のような働き方をするような上司がいたら，自分はすごく働きづらいというか，締め付けられるような感じがするなと思います．働き方の価値観が，私は島耕作が上司にいたら辛いって思っちゃいます．表立って怒鳴ったりとか，そういうのはないけど．

原田：島耕作はソフトだよ．でも，それは評価基準にはならないということだと思うけど，具体的に嫌な点を教えてよ．

新川：企業社会に順応し過ぎていて，んー．つらい．

齋藤：なるほどね．

新川：私だけですかね？

原田：いや，その通り．今の話でかなりつながった感じです．仮説を論証することが可能だよ．つまり，日本が，中国に進出してうまくいかないっていうのは，島耕作みたいな倫理観をもった人間がいたからダメだったといえるかもしれない．あるいは，島耕作のような倫理観をもったサラリーマンが，大挙して中国に行ったから，失敗したともいえる．だって中国人にはそういう倫理観はないから．

川村：それにどこまでも管理しようとしますからね．漫画でも中国人のリーダーをつくって，その人に監視をさせて，人をどう育てる？みたいな，管理をしようとしていますよね．原田先生がよくいう人を設計しようとするみたいなところもありますよね．

齋藤：読者にうけている一つのところでもあって，支配欲，服従させるっていうのは，なんていうのか，自分が普段できないことを漫画のなかではしているわけだから，絶対逆らえないというか．

原田：支配欲ね．つまりコントロールするっていうことですね．暴力的に押さえつけるってわけじゃなくて，日本の科学的な経営を学べば，上手くやれるんだっていう発想は確かにある．島耕作からも，そんな考え方がしっかり滲み出てる．ただ，島耕作って裏で人を貶めるようなことはしないよね．

新川：確かに清廉潔白な感じはします．徒党を組んだりしないですもんね．一人でやりますもんね．

原田：日本社会では，清廉潔白な人は少ないよ．だから，いつも裏工作に励んでいる人からみれば，島耕作みたいにうまくいくはずないと腹の中で薄ら笑いを浮かべているだろうけど，真面目にコツコツ仕事している人は，島耕作を味方のように感じると思う．

新川：そういうファンタジー要素と，日本社会のありようを写し取った要素もあるから，この漫画はバランスがいいとされて，人気があるんですかね？

原田：そうね．だから，若者が読んでも理解できるし，会社人間を再生産しているともいえますね．

新川：再生産できていることにびっくりしました．さっきの話にもありましたけどね．

齋藤：昔の古い支持層だけでなくて，新規開拓者，最近の支持層もいるっていうのはね．しかし，部長にはなれるかもしれないけど，どうあがいても会長，取締役までなるわけないよ．

原田：しかも，大企業で登り詰めていくわけだからね．裏工作もせずに，正々堂々と権力を手にしていきますから．もちろん，現実離れしているけど，その方がかえって，読者の願望に近づきますね．

齋藤：それこそさっきいった昭和30年代のときも，大企業に入るのがいいみたいな，いまもそうかもしれないけど，なにがほしいっていったら，そういうブランドと，支配，コントロール，管理していく力が自分の手に入ればっていうね．もっといっちゃうと，コントロールで一番だめな場所になりかねないのが，教育，学校の世界だと思っていて．

原田：その通りだよ．でも，学校は，誰もが通らないといけない場所だから，コントロールされながらも，管理する側になることを知らず知らずのうちに望むようになるということかな？

齋藤：支配欲というか，なんかあこぎな，腹黒いとかじゃなくて，ふつうにそれが当たり前になっていくの，管理される，するっていう関係が自分の周りで勝手に構築されていくっていうのはサラリーマンにとっては，こういう風になってみたいなって思うのかもしれないね．

原田：サラリーマンやったことがあるみたいな話だね？

齋藤：ないです．でも，非常勤講師15年だから．

新川：自分は会社員ではない立場だからいいたい放題いえるだけで，会社員として働いている方からしたら，一生懸命に目の前の仕事に取り組んでいるんですもんね．私がいうと，部外者が好き放題にいっているようなものですね．

原田：いや，新川先生や川村先生が，島耕作は大したことのない人物だという評価は重いし，重要だよ．サラリーマンが島耕作を読めば，当然，自分たちの肯定感は高まっていく．しかも，サラリーマンという非常に狭い世界の価値観を共有できる．でも，肯定感と狭い価値観ゆえに，中国で失敗したっていうのがわからない，間違いを認めることができない．ところが，お二人の強烈な批判は，狭隘な価値観に風穴を空ける．島耕作が中国に行った，世界に行った，特に中国で勝つことができない．むしろ自分たちの価値観が，弱点として露呈してくる．つまり，中国では通用しない．その原因は，まさに島耕作が内面化している価値観にあるというわけだからね．この発見は面白い．

齋藤：すごいよね．こんなに売れた作品の主人公を上司にしたくないと．大したことないと．

原田：私と齋藤先生は，隅のほうでちょっと島耕作かっこよくない？って思ってますからね．

新川・川村：笑

原田：島耕作批判，ここまで出てくるとは思わなかった．

齋藤：中国に行って，日本企業のほとんどがうまくいかなかった大きな理由の一つが，新川先生がいっていたようなところに原因があって，それに今でも気づいていない日本企業が少なからずあるっていうのがね．

原田：そう．そして，その失敗を隠すために，あるいは自己否定することができないから反中感情が生まれたと読み解くことができますね．

齋藤：なるほどね．向こうが悪いんだよってね．

原田：そういうことだね．私たちの価値観を受け入れない相手がどうかしていると．しかも，島耕作は，すごく頑張ったのに，なんでだめなんだ？という疑問でしょうね．これが反中の一つの源泉だと思う．まさに反省なき反中ですね．

齋藤：なるほどね．

川村：そういうのが滲みでていますもん．WTO に中国が加盟したから，中国も世界基準になっていくだろうとか，あくまでも正しいのは中国でなく，世界で，あわせていくべきだと．約束を守らないとか，いい加減なところとかもこれからはなくなっていくだろうって．

齋藤：確かに．

川村：つまり日本が正しいんだ，中国は変わっていくだろう，みたいなことですよね．よく中国で駐在していた人とかの話を聞いていても，給料の件で，なんで僕があの人よりも低いんだとか，給料を支払うと文句がよく出るとかの話をよく聞くんですけど，日本の人事評価とかも伝わらない，というか通用していなくて，はっきりしろって感じだと思うんですけど．日本人は給与明細書を見せ合わないから，同僚がいくらもらっているのかは知らないですよね．自分がどうやって評価されているのかは，自分の給料から推測するような気がします．ただ，中国の人は給与明細書を見せ合うから，なんで俺があの人と差があるのかって抗議してくるものを説明するのが大変だって，聞くんですけど，説明できないんですよね．この本を読んでもどう評価している

かは出てきていませんが，上に立っている人たちが，中国でどう人を動かして，評価しようとしているか明確でない．

齋藤：そうそう，なるほどね．今聞いて思ったけど，多分そこまで筆者がまだわからなかったんだと思う．何回かフィールドワークしたって書いてあったけど．年収がいくらって日本人は聞かないけど，確かに中国人は聞く．明細とか見せ合って，なんで俺の方が，給料が少ないんだって文句いいに行くわけ．日本の会社からするとおかしいと思うけど，中国人からしたらそれは当たり前で，でもそこまでは見れなかったのかなって．

原田：そうだね．

齋藤：僕の評価なんでこれなんですかってね．日本じゃ絶対ありえないですよ．

川村：聞けないですね．

齋藤：聞けない．

川村：一人で傷つくか，周りはどうだろって思いながら聞かない．

原田：でも本当は，島耕作のところに中国人の従業員が集まってきて，査定について問いただすようなシーンがあっても面白かったかもしれない．いわゆる価値観が衝突するシーンです．でも，作者は中国の価値観が分からないから，落としどころを見つけることができず，描けなかったんでしょうね．やっぱり，島耕作と反中感情の形成には関係があるね．島耕作は英雄でなければいけないという憧れみたいなものがあってね．そういう想いが反中感情につながっていくことになった．そういう感じでしょう．

齋藤：全然，私たちは，反中じゃないと思いながらも，実はここにからめとられちゃっている部分が社会的にあって，それが反中感情に,,.

原田：とくに男性はからめとられていますね．今日，話さなかったら，気づかなかった．それに，男性は，負けをみとめたくないんだろうね．だって，島耕作は負けたことないんだもん．

齋藤：ですね．十割バッター．

原田：ただ，島耕作はあくまでもフィクションの世界だけど，現実に目を向ければ，もう少し残

酷かもしれない．実は，この中国シリーズのなかで，私の知り合いが登場しているんですよ．もちろん，偽名ですけど．実際に，作者の弘兼から取材を受けてもいます．ここでは，S さんとしておきましょう．この S さんは，漫画の初芝のモデルであるパナソニックの社員として長く中国で働いていました．パナソニックは，1978 年，鄧小平と松下幸之助の対談を受けて，中国に進出していきます．パナソニックだけではなく，日本の大手企業は，1980 年代積極的に中国に進出しています．いわゆる，昭和 30 年代の精神とは裏返しともいえる，戦争に対する贖罪みたいなものもあったといわれていますけど，いずれにせよ，S さんも入社してすぐに中国に送り込まれて，まずは語学をしっかり習得して，パナソニックの中国進出の最前線で働くわけです．でも，なかなか思うようにいかない．漫画で描かれていたような辛辣をなめることになる．上手くいかなかった理由はいろいろあるけど，島耕作のように，日本から送られてくる上司，いわゆる常務クラスなのかな，そういう人は，中国ではなく，その視線は日本の本社ばかりを見ていたらしい．本社に戻り自分の出世のことしか考えていないということなんだろう．現地で働いている S さんの頑張りが顧みられることは少なかったんだろうね．しかも，中国の事情をあまり知らない上司の下で，ころころ変わる戦略に振り回されることになって嫌気がさして，結局，パナソニックを辞めてしまう．漫画では描かれていないけど，その実際は，もっと混乱していたみたいだね．

川村：まさに漫画でも上の人が変わると意見もかわるし，僕らをみていないと．

原田：そう．島耕作のような上司はいなかったということだね．

齋藤：なるほどね．

原田：もちろん，島耕作のような人材がいたら，成功したわけではないけど．原因は，島耕作に内面化した価値観だからね．

新川：確かに，島耕作は中国人の考え方や，中国人の生活に根差さないといけないという話をして，他の幹部たちがその考え方に感化されていくシーンがありましたもんね．実際にはなかったと？

原田：そういうことですよ．それはなかったし，さらに・・・．

川村：理解できなかった．

原田：そう．たとえば家電ってさ，どうやって売るって話ですよ．それがやっぱり戦略的に組み

立てることができなかったんだと思います．質の高いものを生産しても，売り方が分からないようではどうにもならない．もっといえば，中国の商習慣を理解できなかったということなんでしょうね．だから，島耕作は中国のあり方を学ぼうというんだけど，それが何かっていうのは漫画でも描かれていない．作者も取材したんだろうけど，分からなかったんだろうね．

川村：いまでも分かってないんじゃないですか？

齋藤：そうだよね．

原田：いま分かっても遅いけどね．それは私たち中国研究者の大きなミスだと思うよ．だから，研究者も，近代化の優等生という感覚を持ち続けていたとしかいいようがない．

川村：でも中国には負けてからだいぶ年数が経ちますよね．多くの人が勝っているつもりで今もいますけど．

齋藤：そう．

原田：まだ勝ったつもりでいる．だから，沈んでいくしかない．

川村：ただ，先ほど，新川先生は，島耕作の倫理観を受け入れることが出来ないといわれましたが，その点は，私も同感しますが，企業社会に順応し過ぎること，働き過ぎることは，ある意味美徳であるようにも受け止められていると思います．でも，この美徳といわれる倫理観を持ち続けると，沈んでいくということですか？

原田：そうですね．中国では勝てなかったというだけではなく，新川先生がいわれる島耕作に内面化されている倫理観というか価値観は，今後の日本企業にとって大きな足かせになると理解すべきでしょう．上手く説明できないけど，たとえば，新川先生と川村先生は，私からみれば，真面目過ぎるという感じです．もちろん，二人に島耕作の倫理観が埋め込まれているとは思わないけど，もう少し齋藤先生のようないい加減さが必要でしょう．だって，齋藤先生，今日の座談会を忘れてたんですよ．

新川・川村：笑

齋藤：いや忘れてないですよ．

原田：いやいや．忘れていたでしょう．というか，座談会ではなく，一緒にお酒飲むつもりだったでしょう．

齋藤：はい．

川村：集合時間過ぎても齋藤先生現れないから，原田先生が齋藤先生にメールをしたら，「忘れてました」って返事が来たよって，笑ってました．それに，「居酒屋を予約してました」とも．

齋藤：そうそう！行きつけの居酒屋においしいサンマが入ったので，サンマの刺身を食べようと思っていたら，メールが入って来て・・・．

原田：このぐらいじゃないとね．

川村：でも，原田先生，中国に行ってなかったら絶対許してないタイプですよ．

原田：そうね．中国に行き始めた頃，約束を守らない中国人にいつも怒ってました．

川村：中国人は，よく約束をすっぽかしますもんね．ほんとにしょっちゅう．飛行機とってもらって，日程合わせて，また明後日ねって，むしろ向こうに誘われて行く予定なのに，当日飛行場に着くと，いない．で，電話すると，「あ，潤子さん，ごめんなさい，今日いけなくなりました」とか．なんのために私ここにきたのかなってなったことはよくある．

原田：あるある．もちろん，すごく真面目な人もいますけどね．どういうわけか私の知り合いもいろいろすっぽかす人が多いですね．でも，「しょうがないよな，こないんだから」って認めているよ．まあ，それは中国人の習慣みたいなものだから，そこを理解しないと，うまくいかない．コントロールしようとしてもね．できないし，やる必要はないんだよ．だから，齋藤先生が忘れてても，とくに何とも思わない．

齋藤：ごめんなさい．

原田：全然気にしなくていいよ，そんなこといったら，齋藤先生じゃなくなってしまうよ．ちょっとドキドキさせてくれるのが好きなところだし，愛おしき隣人だよ．

齋藤：この前も，zoom 会議をやっていて原田先生たちの打ち合わせに遅刻して迷惑かけましたよね．家で zoom 会議やっていて，終わってすぐに行けば間に合うと思っていたら間に合わなかった．

原田：間に合うわけないじゃん．zoom 会議終わった時間が集合時間なんだから．

齋藤：それ一回ミスして，すみませんって．もう二度としませんといっておいて，次もまったく同じミスをしました．

川村：そんなこといっている原田先生も，会議や卒業式やほんといろいろすっぽかしてますよ．「原田先生いまどこにいますか」って電話，よくなってます．

原田：確かに．つい先日も，前期の卒業式を忘れた．

川村：みんな大パニックですよ．学部長がいないって．

原田：電話かかってきて，どこですかって？「えっ名駅だけど」と答えたら，「あと 3 分で卒業式が始まります」っていうから，「出れないよ～」って答えて電話切ったよ．

川村：ほんとよくあります．

原田：でも，副学長のところにいって，すみませんでしたって謝ったよ．でもさ，頭下げながら思い出したんだ．そういえば，去年も遅刻して，ほぼ終わった頃に顔出したなって．齋藤先生と同じで何度もミスを繰り返している．

齋藤：全く一緒．なんでなんだろうな．悪気はないんです．一切．

原田：悪気はないよ．とういうか私たちは，かなり中国ナイズされてしまっていますし，もう変えることはできないし，その必要性を感じることもないよ．

川村：多分私たちがすっぽかしても，なにかあったのかって本気で心配してくれるような気がします．

原田：間違いないよ．私たちは，「まただ」といわれるだけ．新川先生と川村先生が会議とか忘れたら，事故にでもあってないかとか，部屋で倒れてないかとかね．心配するだろうね．だから，その意味でいうと，まだまだ修行が足りないな．

川村：まだまだだな，わたし．すっぽかしはできないというか，すっぽかしをしてしまったら，めちゃくちゃ焦って落ち込みます．ただ，人が予定をすっぽかしたりするのには怒らず，心底笑えますが．

原田：まあ，人の失敗を笑えるなら，10 年後には私たちみたいになっているよ．それに，齋藤先生や私と話していると中国にいるような気分になるでしょう．

川村：確かに．中国に行くと解放感がありますよね．それに，なんだか気分が楽になります．

新川：愛想笑いが無いじゃないですか？あれはすごく良いですよね．私はいつもニコニコしていないといけないと思ってしまいます．

川村：わかります！私もそこにものすごく解放感というか，ほっとしたのを感じて卒論のテーマに感情労働について書いたんです．どこでも気を使っているのがね．知らない人，見知らぬ人にニコニコしないですよね．人をラベリングしたり，肩書でみないから距離もすぐ縮まりますし，なんか，日本のほうがニコニコしているのに，距離がいつまでも縮まらない感じですよ．

新川：たしかに．南京に行ったときに，帰りの飛行機の CA が日本人だったのですが，笑顔でニコニコと接客している姿を見たときに，うっ・・・てなりました．それまでは何とも思っていなかったり，気持ちよかったりした接客が，ニコニコの CA さんをみて，日本に帰ってきちゃった，また自分もニコニコしないといけない毎日が始まると思ってしまいました．

川村：でも，中国に行くと気が楽だよ，とか，感情労働をすると心が燃え尽きてしまうんだよ，とか，日本批判とまではいいませんが，授業で感情労働とか中国の話をしたりすると，そんなに日本が嫌なら出ていって下さいといわれます．

新川：えー．それもいうこと許されないの．なんなんだろう．

川村：中国人はわがままですけど，人のわがままも聞きますから，実はわがままではないと思いますけどね．

新川：メンタルヘルスとか，どうなってるんだろう？

川村：何十年も同じ会社にいないし，会社も何十年も経営しないですよ．日本だと長く続けると，経営能力があるって捉えて，中国はだめだって話になりますけど．でも，中国では，人が会社に固定されていないので，上下関係も日本のようにはっきりできないんですよ．

原田：今，二人の話を聞いていて，思ったんだけど，自分のことを正当化するわけではないけど，齋藤先生と私の場合，確かにいろいろすっぽかすし，まあ，日本の会社ではアウトかもしれ

ないけど，大学教員としての職業倫理が欠落しているわけではないと思います．もちろん，時間を守れず，大事な用事を忘れてしまう私たちに職業倫理が存在するはずないと多くの人は思うでしょう．でも，そう理解する人は，永遠に中国人の職業倫理観を知ることはできないと思います．ほら，中国の笑顔のない接客も，職業倫理観が欠落していることが原因ではありません．彼らには彼らの職業倫理観が存在しています．それが，分からないというか，分かろうとしないだけでしょう．そう考えると，島耕作は職業倫理が喪失しているというか，初めから存在していないのかもしれない．新川先生は，彼の倫理観に違和感を抱いているけど，倫理のような高尚なものを島耕作は持ち合わせていないと思う．彼は，ただルールに従っているだけの存在で，会社のために働くことが大事で，会社第一主義が美徳であるという社会的なルールに従っているだけではないかな．だから，そこに魅力を感じることはできないのでは？ 少なくとも島耕作は，自らの存在に対して問いかけることはない．その働き方に疑問を投げかけることはしません．新川先生がいわれていたけど，自らに疑問の矢印を向けることはありません．そういうふうに設計された人間です．自問しない人間に倫理が育まれることはないでしょう．つまり，職業倫理観がない人間は，中国人の職業倫理観がどのようなものなのか，という問いかけはできない．もっといえば，職業倫理観が欠落した日本人が，中国人に出会えば，亀裂というか，大きな溝が広がることは必然だったといえるでしょう．

さて，いろいろ語ってきましたが，そろそろ終わりにしたいと思います．話の内容がかなり多岐に渡っていますから，なかなかまとめることは難しいのですが，感想を含めて，最後に一言ずつお願いします．

川村：今日はありがとうございます．中国に対して親しみを持っている方たちと話せることが日常ではあまりないので，ほっとする時でもありました．そして，私たちが接している中国をもっと知ってもらいたいなと改めて感じました．この座談会でも話してきたように，日本人は中国に対して親しみを感じていないという人がとても多いですが，私はこれまで中国で，あなたは日本人だといったところで，差別や嫌な思いをしたことはありません．ですが，日本に来る中国の方は，日本人の接し方や日本での生活をどのように捉えているのでしょう．とても気になりました．島耕作の漫画では，中国人のプライベートな姿や友人との交わりなどがあまり描かれていませんが，もっと中国人の行動や語りを伝えるようなものが出てきてほしいなと思うと同時に，私も筆を執っていきたいです．

新川：本日はありがとうございました．私は島耕作という漫画を読んだことがなかったのですが，今回，中国の研究をしている皆さんと一緒に座談会に参加させて頂いたことで，島耕作を様々な角度から掘り下げることができ，とても楽しい機会となりました．その結果，日本企業における中国観について理解が深まったような気がします．加えて，日本の大企業で働く会社員の特異な労働観を考えることにも繋がりましたし，島耕作が描かれた2000年代前半の社会状況を

振り返ることも出来ました．このシリーズから 20 年以上が経過しているので，最新作の島耕作で弘兼がどのように日本社会を切り取っているのかがとても気になるところです．川村先生が指摘したように，島耕作では，中国人のビジネスにおける姿が焦点化されている一方で，プライベートな部分が描かれていません．それが，日本の企業人を描いている島耕作という漫画の限界なのかなと思うので，今後は川村先生や齋藤先生や原田先生にご教示頂きながら，中国に住む人びとの生活について広く知る機会を得ることが出来たら良いなと思います．

齋藤：ありがとうございました．一言でいえば楽しかったです．それぞれの専門性を活かしながら話を組み立てていく座談会は刺激的で，自分自身の問題意識を深める機会になったと感じています．先生方，大切な時間をありがとうございました．中国をどう見るのか，という問いは，歴史学の分野では長く議論されてきました．いま私が感じているのは，ありのままの中国，中国社会，そこで暮らす人々を，まずはそのまま受け入れてみよう，というものです．好きか嫌いかは，それから．まして二項対立的な理解ではなく，もっと自由に向き合ってみるのがいいと思います．

コロナの影響で長く中国に行くことができていません．おそらく，中国社会はコロナ前と変わったと思います．どこがどう変わったのか．興味がありますし，人々の日常がどうなっているのか知りたいです．平凡な言葉ですが，知ることから始まる，そう今日は改めて感じました．

原田：本日は，ありがとうございました．